

不景気の中、就職活動は困難を極めていきます。親御さんの年代と比べると間口ははるかに狭くなり、アルバイトさえなかなか決まらないのが現状です。就職試験に落ち続けて焦っているところに、親から努力不足を責める言葉をかけられて追いつめられてしまう学生は少なくありません。一方で、深刻に悩んで打ち明けたにもかかわらず、「すぐ

に決まるものだから」と流されてしまい、軽んじられたと感じる学生もいます。話を聞いていて感じるのは、学生が前にしている現実と親の認識とのズレです。人は自分の過去の経験から今を理解しがちです。しかし、「あの頃」と「今」とでは

さまざまな条件が違っていることは、すでにご承知のことだと思います。

二松学舎大学でよく耳にするのは、教員資格取得を巡っての親子のズレです。「教員免許さえ持っていれば」という思いは、今は通用しません。少子化の影響から、採用は少なくなっていますし、免許の更新制度もあります。また、

就職課程のカリキュラムは以前と比べてかなり負担の大きなものとなり、他の活動に支障が出ることもあります。教員になりたいという思いが強い学生でない限り、「そこまでして取る意味があるのだろうか」と立ち止まって考えるのは当然のことと思います。親子での話し合いの際、このことを頭に置いてほしいと思います。



また、この時期はとくに身近な勤労者の存在が重要になる時です。彼らは社会人のモデルとして、学生に明に暗に教育をしています。親や教員、バイト先の店長などの何気ない一言に勇気づけられたり、働き続ける強さに気づいたりする。勤労者との交流の機会を持つとよいと思います。

進路選択や就職活動は学生が自分で行う成長への挑戦です。だからこそ大きな負担がかかります。応援団は必要です。一番の応援団、それは親御さんをおいて他にありません。どうぞ、学生の一番の応援団でいてください。